



二葉幼稚園

園のたより

2023 年



2 月 の 聖 句

ここに あいが あります

ヨハネのてがみ | 4章10節

2 月 さん び か

かみよ わたしの

こどもさんびか | 60

ひびきあって



門花壇左側、年長児が班毎に選んだ花々を植えました。雪の中、凍えながらも懸命に咲いています。今年は10年に一度の寒波。各地で雪の被害が相次ぎ、無事を祈るばかりです。先日の警報時、水道は凍ってつららとなり、年中保育室のエアコンは霜とり運転に時間を要して不調、凍てつく寒さの中、11時頃やっと正常に温かい空気が出始めました。

今年度もあと2ヵ月。毎日100程のご家庭から送迎をして頂き、子ども達が保育室へ入る姿を見守る保護者の後ろ姿に様々な思いを感じます。悩みが尽きなかったコロナ禍の保育、各々のお考えがある中で園として揺れながらも考えぬいた方針で歩んできました。が、保護者の皆様や子ども達を不本意ながら悲しませたり、落胆させたりしたこともあったかと苦しい思いが致します。集団の中で子ども達に起きること、嬉しいことも悲しいことも、喜び合える日もあれば、どうすればいいのか葛藤が生じ、一人ひとりの子ども達への「最善」とは何なのか、と真剣に話し合いも重ねています。どんなときも皆で祈りながら歩んでいますが、手探りの毎日です。私達がくじけそうになる時にも支えてくださる保護者の皆様が、子ども達を深く愛して、我が子だけではなく一人ひとりの集団の中での育ちを見守ろうとして下さる…。その思いをひしと受け止め、精一杯応えていきたい、と年度の終わりに改めて思います。

2月の讃美歌「どんなときでも」は、1959年福島県に生まれ、教会につながり、1967年、骨肉腫で闘病の末、7歳で神さまの御許に旅立った高橋順子さんの詩から生まれました。当時は生きるために左足を太ももから切断する他なく「足はまた生えてくるから」と前向きに言っていたという順子さん。癌は肺にも転移し、想像を遥かに超える苦しみの中でも、尚、希望を失わず「学校に行きたい」と願い続けた順子さん。2回目の手術の前の思い、祈り…。

♪どんなときでも どんなときでも 苦しみに負けず、くじけてはならない
イエスさまの イエスさまの愛を信じて

♪どんなときでも どんなときでも しあわせをのぞみ、くじけてはならない
イエスさまの イエスさまの愛があるから

讃美歌を伝える時、先生達は順子さんのことを話したそうです。ある先生は思わずこみあげる涙が頬をつたい…。どのクラスでも子ども達は息を潜めたように静かだったと。ある3歳児◇君は神妙な表情で「僕も7歳になったら、こんな歌が作れるようになる？」と思わず一言、5歳の☆君は家でこの讃美歌をず～っと歌いながら、紙に覚えてたての字で一生懸命この歌詞を書いていました。その字はとても力強く、☆君の心に響いたことが伝わってきました。順子さんと歳の近い年長児は、自分を重ねるがごとく順子さんの思いを感じ取ったようで、一つひとつのことばの意味を噛みしめて、丁寧に、大事にこの詩を歌い込んでいます。大切な思いは響きあい、より深められ…ここに 愛が育まれるように思います。【園長】